

戦前の八竜橋のこと

かた  
かた  
潟語り (三十七)

文・小西 一三  
絵・小西 由紀子

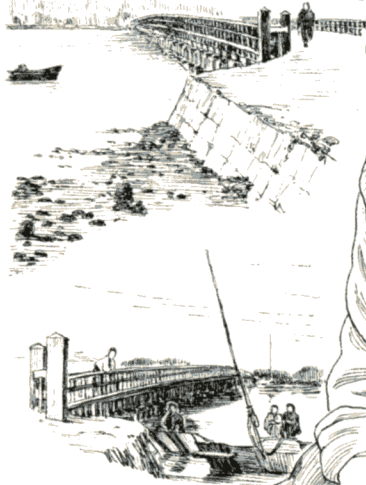
前回は八竜橋の近くに住み、橋の番人をして「橋場の家（はしばのえ）」と呼ばれていた真崎家の真崎敬一郎さんに橋の話を書きました。今回は自性院の近くで生まれ育った柏崎キミ子さんに八竜橋の架け替え当時のことについて話をお聞きしました。

戦時中は金属の欄干を供出して、欄干がねぐなつてしまった

私の実家は天王91番地。前回（36回目）、話っこをしていた「橋場の家」と呼ばれていた真崎さんの家の近く、石川という家だ。ちょうどお寺の前で、今の杉淵鉄工所さんの隣りだ。お寺は子どもたちの遊び場のようなもので、よく境内で遊んだもんだよ。お寺には今でも錫杖持ってるお地藏さんと八大龍王の石碑があるすべ。私のばあさんは「お寺の前を通る時は、必ず地藏さんと八大龍王の前で手を合せて拜め。そうせば風邪もひかねで丈夫になる」と言うもんだ。言うことを守って、ずっと手を合わせてきたが、お陰さんで今でもこうして丈夫でいられるんだな。

架け替え前の橋のことは、小さい時のことだともなんぼが覚えている。船越側はしっかりとした木の橋だったも、天王側の岸の方は土を盛ってその上に木の板を渡した土橋だったと思うな。橋を新しくする工事は確か昭和7、8年頃だった。工事は船越の方から始まり、船越の方ができてから天王側の工事がはじまった。近くに飯場ができて、工事の人たちがいつ泊まっていた。工事

天王町誌 (2010年12月刊行) P160の写真より



町誌によれば、木造橋は明治11年  
にかけられた。永久橋  
のかけかえ工事の着工は  
昭和6年(1931)で昭和7年  
に竣工したという。



覚えてるヨ  
木の橋のこと

柏崎キミ子  
さん(85)

中は橋が渡られねくなるもんだもの、渡し船が出て人を乗せて行ったり来たりしていた。渡し船の人は優しくてな、乗る人が少なね時は私ら子どもたちを乗せてくれた。もちろん子どもは船越に用事などねえ。遊びで乗せてもらったんだ。  
できた橋は昔のと比べれば大して立派な橋だったも、戦争が  
始まった頃、なんと橋の欄干がねぐなつてしまった。欄干は鉄で  
できてたもんだが、お国に供出したのよな。それで欄干のねえ  
橋になってしまった。でも、欄干のねえ橋は危険だといので、  
しばらくしてから代わりに木の欄干が付けられた。お寺でも鐘だ  
とが、かなりの量の金属を供出してたもんだ。お国のため  
に。そういう時代だったもの。